

第 20 回豊橋市小中高連携教育推進協議会議事要録

平成 29 年 6 月 7 日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

## 第 20 回 豊橋市小中高連携教育推進協議会

日時	平成 29 年 6 月 7 日（水）午後 2 時 00 分～午後 3 時 35 分
場所	男女共同参画センター 第 1 ～ 3 研修室
構成員	<p>朝倉由美子 教育委員      芳賀亜希子 教育委員      渡辺嘉郎 教育委員</p> <p>山西正泰 教育長              川村昌宏 時習館高校長      藤原照明 豊橋東高校長</p> <p>古川藤記 豊丘高教頭      森田恭弘 豊橋南高教頭      松野将久 豊橋西高教諭</p> <p>吉田豊 豊橋工業高校長      白井由美子 豊橋商業高校長</p> <p>花井和志 豊橋高校長      鈴木能成 豊橋聾学校長      林智子 豊橋特別支援学校長</p> <p>中野弘二 くすのき特別支援学校長</p> <p>小出志郎 南稜中学校長      水野純夫 松山小学校長      伊丹和彦 八町小学校長</p> <p>池崎勇 東陽中学校長      谷中緑 前芝中学校長      佐藤充宏 豊岡中学校長</p> <p>加藤喜康 教育部長              駒木正清 教育監</p> <p>（欠席者：高橋豊彦 教育委員）</p>
ワグザバー	平野正也 東三河教育事務所指導課長      仲田昌弘 豊川市教育委員会指導係長
事務局	山本誠二 教育政策課長      木下智弘 学校教育課長      他      （全 10 名）

### 議 事 日 程

- 1 本協議会の概要説明
  
- 2 副会長の選任
  
- 3 本協議会の規約変更
  
- 4 報告
  - (1) 東三河小中高特連携教育推進協議会の進捗説明
  - (2) 昨年度までの本協議会活動内容の経緯（食育・食農教育を含む）
  
- 5 今年度の各分科会活動の方向性
  - (1) 英語教育分科会
  - (2) 理科学教育分科会
  - (3) 特別支援教育分科会
  
- 6 その他
  - (1) 今後の協議会並びに分科会の進め方について
  - (2) 連絡・確認事項について

■平成 29 年度豊橋市小中高連携教育推進協議会会長 高橋豊彦 教育委員 公務の都合による欠席により、教育政策課長が本会の冒頭部分について取り回す。

○ 欠席者に代わる代理出席者の紹介

## 1 本協議会の概要説明（山西正泰教育長）

平成 21 年度本協議会が発足した。本市が策定している総合計画の下位計画として教育振興基本計画があり、18 歳までの子ども育ちを政策化・体系化しているが、どうしても義務教育終了時に大きな溝ができてしまうということが話題になっていた。

小中学校と県立学校では設置者や人事制度の違いがあり、この部分で両者が手を取り合うことができなかったが、前教育長が模索をする中で、県立高校との協議を経て、本協議会が立ち上がった。

豊橋で生まれた子どもたちが、豊橋市及び周辺の高等学校に行くという流れを考えたときに、小中高特が連携して一つの組織になることが大切であるとする。

本協議会発足当初は教育委員長が会長を務め、英語教育、理科学教育、特別支援教育、教員交流の 4 つの分科会を立ち上げた。その後、教育交流分科会を閉じて情報教育にシフトし、平成 26 年にその成果を発表して、一定の区切りをつけた。

本会の名称について、小中高に「特」を加え小中高特連携教育への変更が提案されるようだが、今後もしっかりと手を結んでいきたい。

昨年度、東三河教育事務所を中心として「東三河小中高特連携教育推進協議会」が立ち上がった。その一年後には予算化をし、キャリアフレッシュセミナー等を推進されるとのこと。

豊橋市の小中高特連携は立ち上げ後 10 年を経過しているが、未だ予算化されていない。3 つの部会は進むべき方向を明確に定め、それを予算につなげていくことで、子どもたちへの支援も更に手厚いものになると考える。この後の分科会のなかで、斬新なアイデアを出し合い、さらに前進していただきたいと思う。

## 2 副会長の選任 \* 豊橋市小中高連携教育推進協議会規約第 5 条第 3 号に則る

○ 次の 2 名が推薦される。

- ・ 東三河高等学校長会が指定する者から 1 名 川村昌宏 時習館高等学校長
- ・ 豊橋市立小中学校長会が指定する者から 1 名 小出志郎 南稜中学校長

● 全会一致で承認される。

## 3 本協議会規約の名称変更 \* これ以後の議事の取り回し…川村副委員長

○ 次の 2 点の変更について、教育政策課長が提案する

- ① 第 1 条 本協議会の名称を、協議会・分科会の内容に即したものにするため、小中高に特別支援教育の特を加え、「豊橋市小中高特連携教育推進協議会」と改称する。
- ② 第 3 条第 1 号に「教育長及び」を加え、「豊橋市教育長及び教育委員」とする。

● 全会一致で承認される

#### 4 東三河小中高特連携教育推進協議会の進捗説明（東三河教育事務所指導課長）

(1) 平成 28 年度に東三河小中高特連携教育推進協議会を立ち上げた。今年度は具現化の年に位置付けて、3本の事業に取り組む。

① キャリアフレッシュセミナー（10月28日）

中学校1年生500名（東三河全市）及び普通科・農業科等10校の高校に参加依頼

【内容】学科紹介，学校紹介，ブースに分かれて，高校生と触れ合う。

② 小中高特人事交流連絡会（9月，11月）

小中学校から高校へ，高校から小中学校へ，特別支援学校から小中学校へ

【内容】交流した教員の体験談を聞き，自分たちの見識を深める機会とする。

③ 初任者研修

・教員は普通科高校の卒業生が多い。実業高校を見学し実態を知ることで，幅広い見識をもった進路指導をめざす。

・初任者研修の場として，豊川工業高校，田口（林業）高校に依頼する。

(2) 昨年度までの活動内容の経緯（教育政策課長）

昨年度2月に配付した活動報告書（分科会）の中に，活動の成果と今年度の課題が記されているので，確認をしていただきたい。

食農・食育教育の連携の可能性について模索をしてきている。平成28年度，新城高校に協力を依頼し，福岡小の3年生が石巻地区の柿畑で次郎柿の摘果をし，6月に新城高校に持ち込んで柿ジャムを作った。試作品を福岡小の教職員，栄養職員が試食したところたいへん好評であった。今年度も引き続き新城高校の協力のもと，給食の機会に児童が食べられるようにする。うまくいくようならば，他の小中学校へ食農・食育教育として，拡大をしていきたい。

今年度は高校の先生方（栄養関係）に集まっていただき，ここ数年の取り組みの検証とともに，今後の食農・食育教育のあり方について検討をしていきたい。

#### 5 今年度の各分科会活動の方向性

(1) 英語教育分科会…佐藤充宏 分科会委員長（豊岡中学校長）

① 次の3点を強力に推進する。

ア) 小中高の教員に授業研究会への積極的参加を促す。

イ) 現場の取り組みを「英語部報」や「英会話活動を紹介する機関誌」に掲載して，互いの情報を共有する。

ウ) 児童生徒及び教職員の英語教育に向かう意識を集約し分析する。その結果を，教職員にフィードバックして日々の教育活動に役立てる。

② 豊橋東高校生徒の協力を得ているイングリッシュキャンプ等でも，小中高教員が力を寄せ合っていきたい。

③ 年間5回，分科会を開催して，よりよいものを築き，次年度へつなげていきたい。

(2) 理科学教育分科会…川村昌宏 分科会委員長 (時習館高等学校長)

- ① 各種授業研究会等へは、例年通り参加人数を多くしたい。
- ② 豊橋工業高校で公開授業を行う。生徒がモノづくりをしているところを見学し、課題研究的なもののヒントになることを、他の高校の教員に学んでもらいたい。
- ③ 実験レシピを集約し、小中学校の先生方に提供できる可能性を探る。
- ④ 小中学校と高校の教員のネットワークを作りたい。例えば、「この学校には〇〇先生がいて、すばらしい力をもっているのだから、教えを乞いたい」場合など、有効にはたらくので、このような関係づくり(相談相手をつくること)は大切である。
- ⑤ 授業改善の追及に向けて、異校種教員の声を聞くことは大切だと実感した。

(3) 特別支援教育分科会…中野弘二 分科会委員長 (くすのき特別支援学校長)

- ① どの学校でも、特別な支援が必要な子どもたちに対しては、「個別の教育支援計画」を作成して、短期目標、長期目標、指導法や配慮事項を引き継ぎながら、指導を継続することが効果的である。
- ② 昨年度は、子どもたちの情報が、次の学校に上手に引き継がれるための連携方法について協議し、「個別の教育支援計画の活用と引き継ぎの手引き」を作成した。
- ③ 手引き作成過程において、個別の教育支援計画の大切さやその意義について、分科会委員間において、改めて共通理解を図ることができた。
- ④ 今年度は、本手引きの有効活用について検討したりアンケート等で活用状況をつかんだりして、本手引きの内容について見直しを加える。

<山西正泰教育長>

- 予算取りに動くためにも、分科会の従来の活動を継続することは大切だが、夢をもって小中高特で連携できるイベントのようなものも考えていただきたい。新しいものに取り組んでいきたいということ、この後の分科会で話し合ってもらいたい。
- 本市が研究委嘱した「中野小(主体的・対話的で深い学び)」、「高豊中・富士見小・豊南小・高根小(小中一貫教育)」、「牟呂中・牟呂小・汐田小(キャリア教育)」に参加し、目で見て理解していただいたことを所属校に持ち帰ってほしい。

<東陽中 池崎校長>

- 英語教育、理科学教育分科会では、授業参観・交流に取り組んでいる。小中高特連携教育において、子どもの育ちを一貫したものにしていくために大切なことは、やはり教員にとっては授業である。
- イベントをやることや手引きを有効活用することは大切なことだが、特別支援教育においても、授業参観・交流をして教員・子どもたちにとって有益な授業のあり方等について、検討をしていただきたい。

### <南稜中 小出校長>

- 英語教育では、他校種の授業を参観することに関しては進んでおり、高校の先生方にも小学校の授業を参観して意見をいただいている。
- 更に前進するために、県では、昨年度から中高の人事交流が始まっている。これまでの交流実績をもとに、今度は、中高の教員が異校種の授業にゲストティーチャーで参加をするなど、更に一步進んだことができるとよい。そこに至るまでの素地はできていると思うので、ぜひ検討をしていただきたい。
- 現在作成中の「CAN-DOリスト」を共有することで、中高の英語のつながりをより強固なものにしていけると考える。
- これまでの活動を推進していくとともに、何か新しいことに踏み出して行ってほしい、そこに予算が必要ならば計上して作り上げてほしい。

### <渡辺教育委員>

- 小中高特の先生方が連携して、子どもたちの教育に関わっていくことはとてもよいこと。
- 子どもたちには高校卒業の先がある。高校は大学との連携(キャリア教育)が必要であり、その先にある社会に出ていくことが、子どもたちにとっての最終目標である。よって、学校の中だけの話をするのではなく、子どもたちが社会に出ていくときに必要となり、身につけておかなければならない力について考えていく必要がある。社会に出ていくことに焦点をあてて考えていく必要があるのではないだろうか。

### <朝倉教育委員>

- 現在の豊橋市の教育内容には、前向きに取り組もうとうとする姿が見られる。八町小学校の英語を用いた体育授業など、身体を動かしたり目で見たりする取り組みが計画されていることはすばらしい、普段の日常の中に落とし込んで覚えていくことは大切だし、効果的だと思う。
- 1クラス 35 人の場合。ついていけない生徒のフォローや評価がしにくい状況ではないかと気にかかる。人数が少ないと、全体をみることができるが、大人数になると、特に中位レベルの子どもたちの学力の理解定着の把握が難しいのでは。教員間での情報共有をより積極的にしていただきたい。
- 理科学教育での勉強会、実験講座等に参加した先生方が「あっ、わかった」という感動を、教科学習が苦手とする子どもたちに熱く語って伝えていただきたい。
- 幼保小中高特大学までの制度的な連携は大切、更に教える立場(指導者)の連携を大切に。

### <芳賀教育委員>

- 中学生のイングリッシュキャンプに参加した中学生の声を聞く。高校生という身近な人から教えてもらえるので、こんな風になれるのだという目標設定がしやすい。
- 特別支援教育において今年度の課題は「各種研修の更なる充実」。多種多様な障害をもつ子がいる。学力は満たされているのだが、人との関係(コミュニケーション)が上手にできないために、大学を続けられない学生もいる。
- 平成 28 年度 4 月、障害者差別解消法、合理的配慮が求められている。大学側の対応として行う合理的配慮を受けることで学力を伸ばす学生もおり、自立に向けて歩き出している。小さいころから子どもの特性に目を向けて支援をすることで、それぞれの場所で自立して生活していける子どもを育てることができる。本会において、子どもの育ちのつながりをサポートしていく視点で、今後の活動を考えていただきたい。

### <松山小 水野校長>

- 「特別支援の活用の手引き」、現場では有効活用されている。本校の職員は、この子の将来を見通した支援をしたいと話をしている。この子がどういう道を行くのかについて考えたい。
- くすのき特別支援学校との連携や各種事業所との交流会は有意義。小中高特とのネットワーク(相談相手)を作ることが、一人一人の子どもの成長にとってプラスになる。

### <八町小 伊丹校長>

- A L T が英会話活動の他に、音楽・図工・体育の授業で英語を用いた指導をする研究をしている。理科教育は 3 年生以上、就学前の子や小学校低学年の子どもたちは科学好きが多いが、なぜか学年が上がるごとにその数は減ってきている、理科学教育分科会で、このあたりのことが明らかになるとよいと思う。

### <前芝中 谷中校長>

- 授業研究会の場において、主体的で対話的な学びは重要であると考えている。昨年度の花井先生(南稜中)の理科授業研究の際には、異校種の先生方がグループ討議することで、子ども理解、発達段階におけるめざすところを互いに知り合うことができ有意義だった。
- 前芝学校(施設隣接型小中一貫校)は、地域の方々と 15 歳時のめざす子どもの姿について見直すことから話し合いが始まった。15 歳までにどうやって育てていくのか、義務教育から上がっていくところの溝を埋めるために、めざす子どもの姿を見つめつつ、そこから先、子どもが自分の将来を切り開いていく力をどうやって育てていくのか。この辺りのことも視野に入れて検討していただければと思う。

#### <豊橋特別支援学校 林校長>

- 本校は肢体不自由の教育を担っている。年4回の勉強会を催したところ、その1回目には、豊橋市内からの参加者がいなかった。本校から情報発信をしているので、ぜひ参加をしていただきたい。
- 特別支援学級の初心者研修会を実施した。文科省が発行している特別支援学級で使用する教科書の存在を知らない先生方が多い。通常学級の先生方にも情報共有をしたい。
- 特別支援教育分科会では、発達障害に関するだけでなく教育課程、教員の力量アップ等についても話し合っていきたい。

#### <豊橋聾学校 鈴木校長>

- 「個別の教育支援計画活用の手引き」では、「活用」と「引き継ぎ」がキーワード。
- 1人の子が就学前から特別支援学校の高等部を卒業し社会に出てからも、個別の教育支援計画に基づいて周りで支援していく。
- 特別支援学校の授業参観において、教科指導の専門性を高めるという観点ではなく、どのような工夫・配慮をしているかについて知りたいのではないかと思う。
- 手引きの活用にあたっては、学校からの情報発信とそれを受ける学校だけでなく、両者をつなぐ教育委員会も含めて連携が取れるとよい。
- 特別支援学校は増加傾向にある。毎年新しい担任が増えているので、困り感を解消していく必要がある。

#### <豊橋高校 花井校長>

- 本校職員が各種研修会に参加し、多くの気づきを得ている。東陽中学校の研究発表会に参加した際には、外国の子どもたちに対して、すごく手厚く熱心に指導されている姿を見て、自分たちも豊橋市民として育てるのだと実感した。
- 小中高の実践事例として、お母さんのインタビューが印象的だった。教師の困り感ではなく、子どもや保護者の困り感について学ぶためにも、特別支援学級や特別支援学校等との交流が大切だと感じた。

#### <豊橋商業高校 白井校長>

- 豊橋の子どもを一貫して育てる中で、専門高校に進学した子の育成方法についての議論が手薄に感じる。
- 特別支援学校では高校単位で見学をさせていただいている。小中学校へも勉強に行くことのできる機会ができればと考える。

#### <豊橋工業高校 吉田校長>

- 本協議会により中高の隔たりはずいぶんと縮まった。これは大きな成果である。
- それぞれの学校でも細やかな連携が始まっている。もっと推進していきたい。互いに遠慮することなく積極的に連携をしていきたい



#### <豊橋西高校 松野教諭>

- ある高校の授業研究協議会のなかで、中学校の先生が「本時の中で、指導者がいちばん元気ですね」という意見を述べた。とてもショックだったが、たいへん貴重な声として受け止めている。
- 地元の子を地元で育てる観点からも本協議会の意義を感じている。

#### <豊橋南高校 森田教頭>

- 平成30年度教育コースを開設する（定員40人）。多方面のお力を借りながら、体験と主体的・対話的な学びをテーマにし、発表活動も重視する。教育を通じて地域に貢献したいという生徒を育てたい。
- 本コース開設にあたっては、小中学校、特別支援学校、高校の専門学科、さらには愛知教育大学を中心に連携を模索中である。

#### <豊丘高校 古川教頭>

- 本校では、情報共有を更に推し進めるためにも、個別の教育支援指導計画等の事例研究やいじめ防止や発達障害に対する理解を高めることに取り組んでいく。そのために、小中学校のスキルを生かしていきたい。

#### <豊橋東高校 藤原校長>

- 小中高特が連携して教育を施し、子どもたちに最後に求める力は、「社会人として自立する力」、「時代が変わりゆく中で生き抜く力を身につけさせる」ことが大切。
- 各分科会活動は継続していくべきである。
- 時代に即したもの、例えば「キャリア教育」「グローバル教育」等に関する分科会を期間限定でもよいので設置して、閉じるということがあってもよいのではないかと。

#### <副会長 小出校長>

- 情報共有をしながら子どもたちを見とり、偏見もなく社会的な自立へ向けて支援をしていくことは、特別支援も通常学級でもその教育は同様である。
- くすのき特別支援学校との連携に関わるなかで、「福祉や弱者へ手を差し伸べるという視点での交流はしてはいけない」と担当教員へは指導をしている。これからの社会を作っていく、同じ仲間との交流であるという視点で交流を進めていく

#### 6 今後の協議会並びに分科会の進め方（教育政策課長）

- 本協議会は、毎年この時期に開催し、同時に分科会もスタートする。年度末の2月ごろに1年間の活動内容まとめについて報告をしていただく。
- 山西教育長や小出副委員長からご指摘があったように、予算が必要になりそうな時や、臨時の会合開催が必要な時には事務局に問い合わせさせていただきたい。

## 7 オブザーバーからの意見や感想

### <豊川市教育委員会指導係長>

#### ○ 異校種間の交流

- ア) 御津高校が御津中学校，御津南部・御津北部小学校と英語を通じた交流
- イ) 豊川工業高校が代田中学校と日常的に教職員の交流
- ウ) 宝陵高校は一宮中学校の文化祭でブースを作って交流
- エ) 豊川養護学校は豊川中部中学校と交流

#### ○ 本年度，県の事業「キャリアコミュニティプロジェクト」を開催

キャリア教育の視点で小中高の連携を行う。現在までの結びつきを大切にして，御津高校と御津中学校，御津南部・御津北部小学校間では英語教育を通じて活動を展開し，豊川工業高校と代田中学校間ではモノづくりの視点で交流を進める。最終的には，豊川市内の全小中学校及び高校にその成果等を還元していく。

■川村昌宏 副会長の「閉会の言葉」により，閉会

■引き続き開催される分科会のもち方等について事務局が説明する。